

儲かる農業を担う次世代人材の育成

農業総合センター農業大学校

農業大学校では、今後の茨城農業を担い、地域での指導的役割を果たす人材を養成するため、農業政策や最新の生産技術を踏まえたカリキュラムの導入、共同生活や経営実践プロジェクト等の課題解決型学習を通じた自主性の育成、優れた経営者マインドと技術を学ぶ先進農業派遣実習等に取り組んでいます。最近ではスマート農業技術について、学生が技術を適切に活用できるよう、企業や関係機関と連携し、スマート農業を学ぶ機会を充実させました。また、有機農業については「みどりの食料システム戦略」「茨城農業の将来ビジョン」を踏まえた教育を実施し、学生の理解を深めました。

経営実践プロジェクト学習

学生自らが農産物の生産から販売までの一連の取組を戦略的に行うことで、経営に必要な知識やスキルの習得と、儲かる農業を実践できる経営者マインドの醸成を図っています。

特別講義での座学・演習に加え、卸売業者や小売店、飲食店等との販売交渉や店頭販売等の実践を通して、経営目標の設定や事業計画策定の重要性、販売価格の設定や販売戦略の策定方法を学んでいます。



図1 生産計画作成に取り組む学生たち



図2 2年生の実習の様子

先進農業派遣実習の実施

優れた農業経営者のもと実際の農業経営を経験し、高い農業技術や経営管理方法、儲かる農業に必要な経営者マインドを学ぶため、県内の農家や農業法人に学生を派遣して実習を行っています。

先進農業者の効率的な作業体系や経営感覚に触れることで、学内実習では得られない貴重な経験を得て、学生の営農に対する意識は大きく成長します。令和7年度は約60か所の派遣先（うち6か所は有機農業を実践する経営体）で学生が実習に取り組みました。

新技術や新たな取組に関するカリキュラムの充実

最新のスマート農業技術について、関係機関や民間企業と連携した講義や実演会を実施しています。令和7年度は13回実演会等を実施し、延べ127名の学生に最新技術を経験させました。

また、有機農業については令和6年度から授業科目を新設したほか、令和7年度はナシの白紋羽病治療用温水点滴処理機を導入し、化学農薬に依存しない環境負荷軽減型の防除技術への理解を深めています。



図3 メーカーによる自動給水栓の説明（農大ほ場）